

不思議な世界をリアルに生きる—創作の世界—

なかひら まい

Midsummer
Greetings
2012

©Mai Nakahira

2012年8月25日
ユング心理学研究会夏期特別セミナー
『不思議なものとの出会い』

不思議な世界をリアルに生きる－創作の世界－

2012年8月25日のユング心理学研究会夏期特別セミナー『不思議なものとの出会い』にて、「不思議な世界をリアルに生きる－創作の世界－」と題して、20分ほどお話をさせていただきました。その様子を簡単にまとめてみました。ご興味のある方は、お読みいただければ幸いです。

なかひら まい

なかひらまいプロフィール：1970年3月9日生まれ。セツ・モードセミナー卒業。童話作家・イラストレーター。2005年12月『スプーと死者の森のおばあちゃん～スプーの日記～』（トランスビュー刊）で作家デビュー。その後「スプーの日記」はシリーズ化され3巻まで刊行。2011年12月、古代史ドキュメンタリー『名草戸畔 古代紀国の女王伝説』出版。2012年3月よりユング心理学研究会役員。

●「現実よりリアル」なファンタジーの世界

童話などファンタジックな世界を描く仕事をしていると、現実とかけ離れた不思議な日常を過ごしているように思われることがあります。しかし、それは読者が作家に対して抱く幻想なのではないでしょうか。創作をする人たちに起こる「不思議」とは、そういうものではないように思います。

不思議の話題に入る前に、まず、ファンタジーとは何か、ということについて、簡単にお話ししたいと思います。わたしは、ファンタジー表現とは、砂糖菓子のような幻想を描くものではなく、物事の「真実」を描くひとつの方法だと考えています。その一例として、『わらしべ長者』という昔話が挙げられます。『わらしべ長者』のあらすじは、以下のとおりです。

- 1) 真っ暗な観音堂で、観音様に「貧乏をなんとかしたい」と祈願。
最初に手に持ったものを手に持って旅に出なさいとお告げが下る。
- 2) 観音堂から出てつまずいて転んで、偶然、1本のわらしべを手にする。
- 3) アブがうるさかったので、わらしべに結びつけると、アブが飛んでわらしべを引っ張る。
- 4) それを見た赤ん坊が面白がって泣き止み、母親からみかんをもらう。
- 5) 上記のような偶然の出会いで、持ち物が、みかん→反物→馬と変化。
最後に馬と引換に屋敷をもらって金持ちになる。

この物語は一見すると、偶然おこった不思議な出来事が連鎖して、ご都合主義的に展開し、主人公がお金持ちになるお話に見えます。しかしそれは、物語の表面をなぞった解釈に過ぎません。この物語をファンタジー表現の考え方で読み解いていくと、たとえば、以下のような解釈をすることができます。

- 1) 真っ暗な観音堂で観音様に祈願 → 自分の心に向き合う。
- 2) 最初に手に持ったもの → 「今の自分」が持てるもの。
- 3) わらしべ → 心の中にあるエネルギーの「元」のようなもの。
- 4) アブを結びつけて引っ張られるわらしべ → エネルギーが動き出した「こと」の象徴。
- 5) みかん → 母性的な愛や幸せの象徴。赤ん坊を喜ばせたので手に入る。

よく考えると、こういうことは、日常よくあると思いませんか？ 真剣に何かをしたいと思って行動したら「こと」が動いていく、というような経験は、誰でもしているのではないのでしょうか。しかし、どうしてそういうことが起こるのかは理屈では説明がつかず、不思議な感じもします。つまり、生きている事自体が「不思議」なことではないかと思うのです。わたしはファンタジーとは、「心の働き」や「自然の理（ことわり）」を、様々な象徴モチーフを使って顕したものだと考えています。そして、その働きそのものが、「不思議」なのです。

一見して絵空事のように見えるファンタジーは、実は、「現実よりもリアル」な世界を表現するための方法論といえます。そういうわけで、ファンタジー作家は、実は「超リアリスト」の側面が強く、夢見がちな性格でもないように思います。

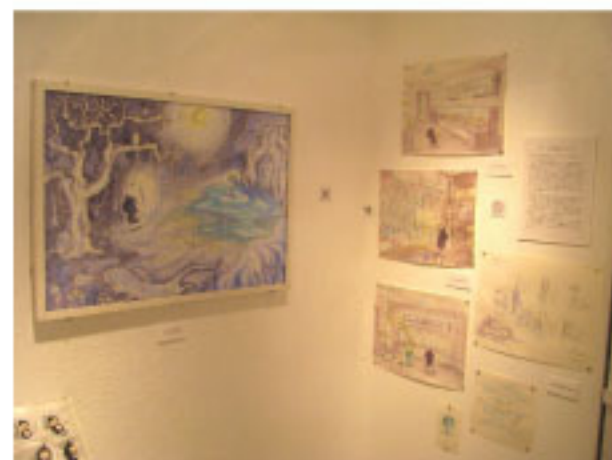
●作品を実現していく「現実」の中で

作家はリアリストですから、日常では、作品を作ると同時に、必要なことを淡々とこなしているだけです

ただストーリーを書くだけ、絵を描くだけでは、作品を読者に届けることはできません。たとえば、出版社から本として出版される場合は、編集者とのやりとり、装丁家による装丁、営業の方の迅速な対応など、様々な工程を経て、ようやく作品が読者に届けられます。出来が良くなければ、手にとってもらうこともできません。



展覧会を行うのであれば、額装、会場でのレイアウト、フライヤー制作などを計画的に行い、作品を見てくださるお客様に楽しんでいただけるよう、工夫しなければなりません。舞台裏では、創作と並行して、どうやって作品を世に出していくか、現実的な問題で頭がいっぱいになります。



これは、横浜桜木町の商業施設コレットマーレで行われた、新作絵本の展示販売の様子です。絵本のテーマをコンセプトにハンドメイドの雑貨も制作し、店舗デザインまで行いました。



2012.05～06 横浜桜木町コレットマーレ

そうした展示販売をきっかけに、新作を発表する機会に恵まれました。そのうち、展覧会のたびに絵本を書いて発表するという「流れ」が生まれてきました。気がつくと、たった1年のうちに、商業施設やギャラリーなどで、10作の「小さな絵本」を書き下ろしていました。



2012.05~06 横浜桜木町コレットマーレ



2011.10 代官山アートラッシュ



2011.07 新宿 FEWMANY

もちろん一つ一つの機会が簡単にできているわけではありません。一人で何もかもできているわけでもありません。いろいろな方たちのお世話になり、「こと」が動いていきます。いろんな偶然（シンクロシティ）が重なることもあります。こうした作業をする中で、作品の発表が実現できること自体が、「不思議」なことではないかと感じることが多いです。



2012.05～06 横浜桜木町コレットマーレ

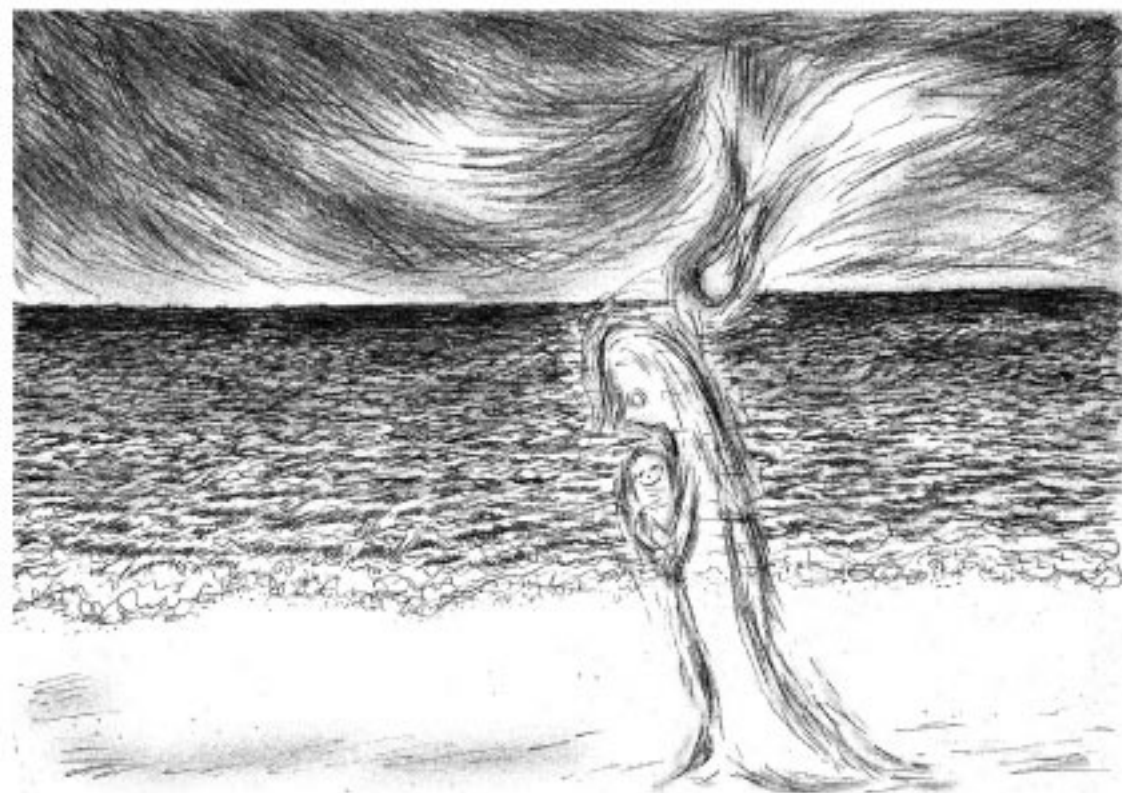
作品を世に出す以前に、作品が生まれること自体も「不思議」です。より、不思議を感じやすいのは、コラボレーションの作品です。たとえば、これは、現在制作中の未発表作品で、哲学者の甲田烈（こうだれつ）先生の企画から生まれた「妖怪画」です。妖怪のエッセイを甲田先生に書いていただき、なかひらが絵をつける形になります。企画内容についてここで詳しく触れませんが、コラボ作品は、出会いがなければ、「その作品を描くこと自体ありえない」ので、より「不思議」を実感しやすいのです。



未発表作品の「妖怪画」企画・文・甲田烈 絵・なかひらまい

特に意識はしていなくても、別にお化けを見ることがなくても、誰にとっても、人生は「不思議」の連続なのではないでしょうか。

おわり



未発表作品の「妖怪画」企画・文・甲田烈 絵・なかひらまい